

2023年度「第1回宮城学院女子大学附属 キリスト教文化研究所公開シンポジウム」 「音楽とリベラルアーツがつむぐ地域革新」報告

天 童 睦 子

2023年11月4日(土)13時-15時40分、宮城学院女子大学音楽館ハンセン記念ホールにて公開シンポジウム「音楽とリベラルアーツがつむぐ地域革新」が開催された(主催 宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所, 共催: 女子ミッション教育史研究会)。シンポジウムは、宮城学院女子大学学芸学部音楽科学生による演奏(オルガン, 声楽, クラリネット, 2台ピアノ)で幕を開けた。

本シンポジウムは、キリスト教主義教育に根ざす本学の女子教育歴史的展開をふまえ、とくに音楽とリベラルアーツに焦点を当てた歴史社会学的考察を行うものである。

まず趣旨説明として、片瀬一男(女子ミッション教育史研究会代表 東北学院大学教授)より、本シンポジウムは、2017年より継続してきた「女子ミッション教育研究」の一環であり、今回はゲストに「近代移行期における地方の洋楽受容研究」に取り組んでおられる北原かな子氏(青森中央学院大学教授)を迎えたこと、また本研究グループのメンバー相澤出氏より「女子ミッション教育史研究会」が実施した宮城学院音楽科の卒業生調査の分析をふまえて、音楽がつむぐ地域文化の革新を報告がなされることが述べられた。

北原かな子氏の基調講演『「辺境」からみる洋楽受容と近代東北の音楽家

たち—キリスト教受容との関連において—」では、第一に、東北士族とキリスト教音楽が、明治初期の東北地方の社会・文化的風景とのかかわりで論じられた。戊辰戦争において、ほとんどの地域が「敗者」となった東北地方でキリスト教が広がった背景、またその広がりには西洋音楽の普及と強く関連づけられる。第二に、東北出身の音楽家として楠美恩三郎が紹介され、楠美家が近世から近代にかけて、弘前藩の要職を務める傍ら、「音楽の家」としての強い自負心をもった家系であったことが述べられた。楠美恩三郎は尋常小学唱歌の作成にも大きな役割を担った人物であるという。

北原氏は、当時の日本人にとって、西洋音楽の音階を歌うことは容易ではなく、とりわけ西洋音楽（賛美歌）を歌うことの難しさに直面したのは旧武士階級であったと述べる。また明治初期の西洋音楽の受容の経緯を具体的な曲の紹介を交えて立体的に浮かび上がらせた。講演では、文化的・地域的な東北の一体感、「辺境」は逆に最先端となることなど、明治期の音楽教育について斬新な解釈がなされ、充実した基調講演となった。

次に、研究報告では、相澤出氏（東北医科薬科大学准教授）より、「音楽がつむぐ地域文化の革新—宮城学院同窓生のライフコース分析—」と題して、卒業生の丹念なインタビュー事例をもとに、音楽文化の伝達に寄与した女性のライフコースが語られ、戦前、戦後の女性の生き方、ピアノの受容、女性と教育の変容が報告された。女子ミッション教育史研究会ではこれまで、教育社会学、歴史社会学の視点から、戦前の女学校、女学生の社会的位置づけなどを研究し、そこではミッション系女子教育が、伝統的ないわゆる「良妻賢母」とは異なる、モダンでリベラルな女性像の形成につながっており、女学生たちの教養にも独自性があることを共有してきた。

これまでの共同研究を発展させて、相澤氏は第一に、戦前および戦後における「ピアノ」の意味と地域社会に分け入って、とりわけ西洋由来のピアノ

が、近代家族の家庭文化にとって、とくに女性にとっての「高級文化の象徴」となった経緯を論じた。

第二に、本報告の事例は、質的研究のなかでもライフヒストリー（生活史）研究にあたり、宮城学院同窓生 1 名（S さん）にインタビューを行い、話者の談話を、ご本人の主観的捉え方や感じ方を含めて検討したこと、その一人の人生の歩みから、戦前、戦中、戦後の、地方におけるミッション系女子教育を受けた方の生き方の特徴を描き出すことを試みたとの解説があった。S さんは調査時に 93 歳で、その談話からは、戦前のミッション系女学校の音楽教育と宗教文化、とりわけ宮城女学校の場合、アメリカ由来のそれが女性たちに教育を通していかに伝えられたか、さらに、本学で学び、深く影響を受けた女性たちが、戦後、地方における音楽文化の新たな局面をいち早く切り拓いてきたとの考察がなされた。

以上二つの報告について、本学の松本晴子教授（音楽教育学）、およびゲストコメンテーターの遠藤恵子氏（東北学院大学名誉教授）より貴重なコメントを頂いた。

参加した学生からは「辺境が最先端という言葉が印象に残った」「音楽教育と宗教文化のかかわりに興味をもった」「卒業生のライフコースを知る機会となった」などの感想が寄せられた。またパイプオルガンの演奏を生で聴く機会は貴重で、学生たちの演奏がどれも素晴らしく良かったとの声もあった。参加者は宮城学院同窓生、一般市民、本学教職員、学生ほか約 120 名。ご協力、ご参加くださった皆様に心より感謝申し上げます。

企画・司会 天童睦子（本学教授 女性学、教育社会学）。

本シンポジウムは JSPS 科研費 21K02245（研究代表 片瀬一男）の助成による。